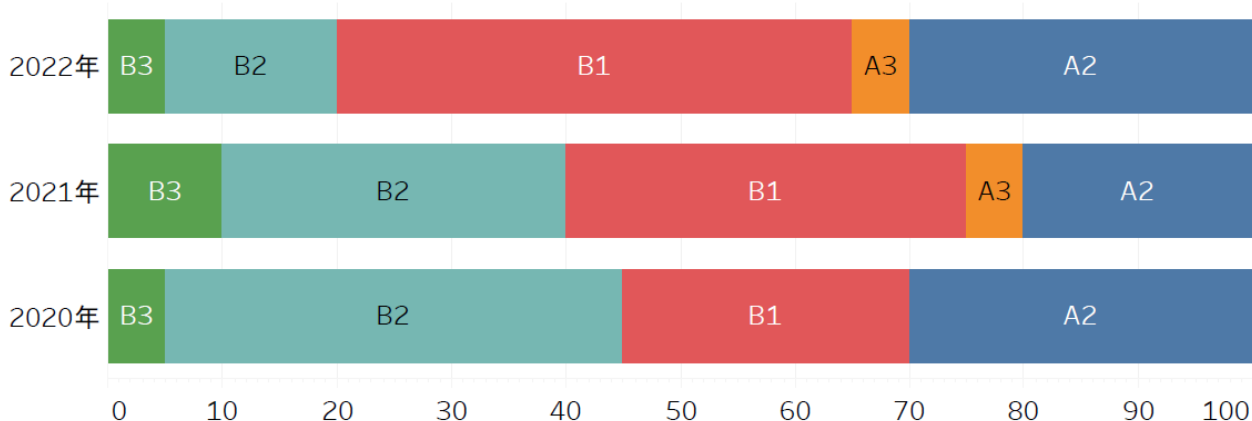


## 2022年 慶應義塾中等部 算数

各年の思考コード別出題割合は次のようになります。論理的思考力・応用力が求められる思考コード B の問題を中心として、知識・技術の再現力が求められる思考コード A の問題が出題されます。2022 年は、B1、A2 の出題が増え、取り組みやすい難度となりました。そのため、1 問の失点が大きな差を生む結果となりました。



大問 1 は、昨年と同じく、計算、一行題です。どれも確実に得点しておきたい問題です。(5)は、「0」が含まれていること、一の位が「0、2、6」になることに注意します。大問 2 も、例年通りの一行題です。どれもテキストで見かける典型題となるため、確実に得点しておきたいです。(3)は、少し複雑になりますが、線分図を利用して、ていねいに整理すれば、状況を捉えることができます。大問 3 も、例年と同じ、図形の一行題です。(3)は、類題の経験の有無で差がついたと思われます。(4)の回転体は、捉えやすい立体ですが、計算の手間がかかるため、注意が必要です。

大問 4 は、立体の切断です、こちらも、テキストで見かける「断頭四角柱」です。(1)、(2)どちらも確実に得点しておきたい問題です。大問 5 は、全体の中でも難度が高く、差がついた問題と言えます。(1)は、グラフを読み取ることで、「太郎」と「次郎-太郎」の速さがわかります。得点しておきたい問題です。(2)は、隔たりグラフから、線分図などで 3 人の移動を整理します。かなり複雑になるため、この問題が正解できれば、大きなアドバンテージとなります。大問 6 は、作れない数を調べる問題です。類題を経験したことのある受験生も多かったと思います。(1)は、調べてみることで「19」を発見することができます。(2)は、「11 も 13 も必ず 1 つは加える」点に注意します。(1)と同じように調べることで、作れない数を発見することができますが、上記の注意点を言い換えると「11 だけで作れる整数、13 だけで作れる整数はあり得ない」ということとなります。つまり、11 の倍数、13 の倍数は作れません。すると、11 と 13 の最小公倍数 143 は作れないと気づくことができます。

基礎的な問題が中心となりますが、設問数が多く 45 分では厳しいと言えます。そのため、典型的な問題は、素早く再現できるように、自分の中で知識化しておく必要があります。あくまでも予想ですが、大問 3(3)、(4)、大問 5(2)、大問 6(2)が取れなかったとしても、およそ 8 割には達することができると思います。